

秋田県唯一の大規模な仏殿

ちょうこくじだいぶつでん

長谷寺大仏殿

由利本荘市赤田地区（本荘地域）に所在する長谷寺大仏殿は、秋田県下において唯一の大規模な仏殿であり、秋田の近代寺院の構造、装飾等の様式を知る上で貴重な建造物であることから、平成 25 年 12 月 24 日、国の有形文化財に登録されました。

長谷寺は、本荘地域赤田地区に所在し、藩政期には亀田藩に属していました。本建造物は、藩主岩城氏に崇敬され、祈願所とされた寺院です。開山は是山泰覚で、安永 4 年(1775)に庵を結んだのが始まりとされています。赤田の大仏として親しまれている長谷寺式十一面観世音菩薩立像は、是山泰覚が天明 4 年(1784)に奈良長谷寺・鎌倉長谷寺にあやかって造立を発願し、三年の歳月を要して天明 6 年(1786)に完成させたものです。一方大仏殿は、寛政 4 年(1792)から建設が着手され、寛政 6 年(1794)に完成しましたが、その後明治 21 年(1888)に客殿より出火し、堂塔伽藍が全焼してしまいました。

現在の大仏(像高二丈六尺〈7.878m〉)は、当時本荘大町の呉服商であった佐々木藤吉翁より寄進を受け、明治 25 年(1892)に復元され、明治 29 年(1896)に大仏開眼落慶法要が行われたものです。明治 26 年(1893)に再建された大仏殿も、当初の様式や規模を忠実に復元したとされ、棟札から建築年などが確認できます。

大仏殿は、総高七丈と言われる約 21.2m の高さを持つ上下二層の建造物で、上下層ともに四面に擬宝珠高欄(ぎぼしこうらん)が巡り、上層南面にあたる正面側には、奈良の東大寺大仏殿同様の観相窓(かんそうまど)があります。外側には切目縁が廻り、18本の八角の側柱が建物を支える構造です。

また、屋根の垂木部は扇垂木で、内部は大仏を安置するため吹き抜けになっており、大仏周囲の円柱の入側柱 4本が、下層から上層へ一本通しで大仏殿全体を支えています。なお、屋根は再建当初木端(こっば)葺きでしたが、昭和 20 年代に銅板に葺き替えられました。



長谷寺大仏殿

大仏殿は彫刻や絵画などの装飾も豊富で、棟梁を務めた宮大工の小川松四郎は社寺建築の彫刻家としても知られており、多くの社寺建築を手がけています。さらに、大仏上部格天井の「三十六禽之図」は、谷文晁に師事し、本荘藩の御用絵師になった増田象江、板扉絵の「三十六歌仙」は、明治の名工と言われた大内地域の堀藤兵衛の作品です。加えて、寛政7年(1795)に亀田藩主より山号寺号を受けた際の揮毫は、再建時に下層の寺号額、上層の山号額に復元されました。



十一面観世音菩薩立像

長谷寺大仏殿は、秋田県下において唯一の大規模な仏殿であり、棟札により建立年代も明確で、秋田の近代寺院の構造、装飾等の様式を知る上で貴重な遺構の一つです。また、堂内の十一面観世音菩薩立像は昭和61年(1986)に由利本荘市指定有形文化財に、祭典である赤田大仏祭りは平成9年(1997)に秋田県指定無形民俗文化財になっており、種別を越えて文化財が継承されていることから貴重なものと言えます。



赤田大仏祭り

用語説明

ぜざんたいがく
是山 泰 覚：智仙（汗かき地蔵庵）、覚秀（龍源寺）の二人とともに、後に地域で三大傑僧と呼ばれた。

ぎぼしこうらん
擬宝珠高欄：高欄は、縁や階段などの端に設ける装飾と安全を兼ねた手すりのこと。擬宝珠は、親柱上端などにかぶせてある覆いで、上部は宝珠形につくり、装飾と柱木口の傷みを防ぐ機能を兼ねたものである。ネギ花に形が似ているので葱台（そうだい）とも呼ばれる。

きりめえん
切目縁：縁板を敷居と直角方向に張った縁。濡れ縁に用いる。

こつばぶき
木端葺き：木端で葺いた屋根。木端は25×15×0.5 ぐらいのスギなどの薄い板で、小羽板（こばいた）・柿板（こけらいた）・粉板（へぎいた）ともいう。

おうぎだるき
扇垂木：禅宗の寺院建築に用いられる放射状に配置された垂木のこと。

たにぶんちよう
谷 文 晁：江戸時代後期の日本の画家。江戸南画の大成者であり、その画業は上方の円山応挙、狩野探幽とともに「徳川時代の三大家」に数えられる。

きご
揮 毫：毛筆で言葉や文章を書くこと。「毫を揮う（ふでをふるう）」からこの語がある。